

第一次国共合作期におけるコミンテルン軍事顧問の役割 (1)

—А.И. Черепанов: Записки Военного Советника в Китае—を中心として

滝 本 可 紀

On the Role of Advisers of Comintern in the Period of the
First Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

The Soviet offered to give up all privileges under the old tsarist unequal treaties, which aroused widespread pro-Soviet enthusiasm. Under that atmosphere, agents of Comintern approached to both Communists and Kuomintang (Chinese Nationalists). Sun Yat-sen wished to revive and reorganize Kuomintang to re-unify the nation and to abolish foreign privileges under the unequal treaties. His repeated requests for Western aid got no response. Thus, he developed an alliance with the Comintern. With the Soviet advice Sun began the creation of a party army. Chiang Kaishek became the superintendent of the Whanpoa Military Academy which was established by the fund of the Soviet. At the same time a group of the military advisers came to help Kuomintang. The author of "Memoirs of a military adviser in China, Alexander Ivanovich Cherepanov, is one of the military advisers. He is a lieutenant general who worked as a military adviser to the National revolutionary army in China in 1920's and a military adviser of the Chinese Government during the Sino-Japanese War. Citing concrete examples, the author shows how important role played the international assistance of Soviet working people in the battle of the Chinese people against the oppressive.

第一次大戦は、この戦いを進めていた各国の指導者達が夢想だにしなかったロシア革命を生み出した。これは今まで、単なる理念であり、主義でしかなかったマルクス主義が具体的な姿を表したものであった。その後のソ連及び増加した社会主義諸国家の歴史的進展を見れば、種々の批判のあることは否めないが、それにも拘らず、これは人類史上特筆すべき巨大な事件であった。この革命の波はロシアに留まらず、全世界に広がって行った。しかし、ヨーロッパに於ける革命の波は第一次大戦後の相対的安定期に治まった。(その内部には、秘かに、あるいは公然と、特にドイツ、イタリアでは、ファシズムの芽が出始めていたとしても)。しかし、アジア、特に中国に於いては、革命の波はますます増大していった。

第一次大戦はドイツ軍国主義に対する英米民主主義の勝利と宣伝されていた。また、ウィルソンの民族自決も

被圧迫民族にとって大いに歓迎されるものであった。だが、これらは第一次大戦終了後のパリ講和会議によって裏切られてしまった。特に日本の二十一カ条要求に対する中国人の反対は熾烈を極め、これは五四運動となって中国史上、初めての大衆運動にまで燃え上がった。

当時の中国の民族的課題としては、一つは民族の独立であり、一つは社会の近代化であった。これは反帝、反封建のスローガンに表されていた。ロシア革命によって、北方の帝国主義国家が逆に中国の同盟者になり得る可能性が感じられた。マルクス主義は欧米工業先進国の社会主義理論にすぎないと、中国の知識人に思われていたが、ヨーロッパでは後進国と思われていた国ロシアに革命が生じたため、それは俄かに論議の対象となり、そればかりか実践の課題にもなった。またソビエト・ロシア外務人民委員代理レオ＝カラハンによる1919年の、旧ロシアが保持する中国に対する特権の放棄宣言は中国

人民に大いに歓迎され、ソ連は中国人の最も友好的な国となった。ソ連政府による当時の北京政府への働きかけと同時に、コミンテルンによる働きかけが中国のコミニスト及び国民党、すなわち孫文に対してなされた。コミンテルン第二回大会に提起された「民族及び植民地問題について」のレーニンのテーゼが採択された。これによって、植民地国家に於けるプロレタリアによる社会主義革命と被植民地地域に於ける民族運動とは統一して考えられるようになった。1920年春、コミンテルン極東部長ボイチンスキーが北京に現れ、李大釗と会見、さらに上海で陳独秀に会見している。1921年にはコミンテルン極東諸国担当執行委員会代表として、マーリンが中国に現れ、中国共産党成立の一全大会（上海）に参加した。マルクス主義の理論では、一つの政党は何らかの階級を代表していることになっている。共産党は当然プロレタリアートを代表している。しかし、当時のプロレタリアーすなわち共産党は単独で民族解放戦線を結成するにはあまりに弱すぎる、というのが当時のコミンテルン内のスターリン派の考えであった。そこで中国の内部にある大きな存在、国民党、その象徴的人物である孫文が浮かび上がってきた。コミンテルンは中国のコミニストと接触と同時に、孫文との接触も精力的に開始した。

1920年、ボイチンスキーは李大釗、陳独秀に会うと同時に孫文にも会っている。中共一全大会に参加したマーリンも孫文に会っている。その際、彼は労働大衆と連合した強力な政党樹立、軍官学校の設立による自己の武力の獲得を説いた。1922年、ソ連政府大使ヨッフエが北京政府と国交回復の交渉に中国に来た時、同時に孫文とも会見し、1923年、1月に孫一ヨッフエ共同宣言が発せられた。その内容は、ソビエト制度は中国に於いては採用不可能であるが、中国の統一と国家的独立のためにはソ連は援助するものである、ということであった。

中国共産党側に於いても、コミンテルン第二回大会の民族・植民地問題に関するテーゼに基づき、二全大会で国民党との統一戦線に関する決議、コミンテルン加入の決議が採択された。ここに第一次国共合作が進められることになったが、これは対等な党の間の合作というよりは党内合作“block within”であった。孫文は蒋介石をソ連に送って政治委員制度や軍事組織を研究させた。1924年1月、国民党第一次全国代表大会が広州で開かれ、連ソ・容共・労働援助の三大政策が決定されると同時に、国共合作と党組織をソ連にならうことが決められた。国民党役員には李大釗以下多数の共産党員が参加した。理論的には言えば、中国共産党はコミンテルンの一

支部にすぎないのであるから中共の党員が国民党に入党できるなら、他の支部、例えばソ連共産党員が国民党組織に入っても、何ら差し支えないわけである。かくてソ連共産党政治局、ボロディンが政府最高顧問になった。また国民革命軍養成のための基礎としての軍官学校の成立は以前から切望されていたが、広州郊外に黄埔軍官学校が設立され、蒋介石がその校長となった。これはソ連の資金で設立されたもので、その指導のためコミンテルンからブリュールヘルを団長とする軍事顧問団が到着した。本論文のЧерепановもその一員である。彼の回想録は当時の事件を生き生きと我々に甦らせてくれる。現在の烈しい中ソ対立から見ると隔世の感があるが、コミンテルン当時の方針に従った中国共産党の敗北の歴史的経験は現在の対立と繋がっているものがある。なお、この回想録 Записки военного советника в Китае, Главная редакция восточной литературы издательства «Наука», М., 1976 А.И. Черепанов の序言を現代のソ連中国学者の Лев Петрович Делюсин が書いているが、現在から見ても当時のコミンテルンの方針は基本的に正しかったし、また当時、それ以外の方針はとり得なかった、という立場をとっている。更に彼の序文から、かつての国民革命当時のソ連の協力の事実、「なかば忘れられている事実」を中国人に思い出して欲しい、との気持がうかがえる。

本書の扉の部分に Черепанов について次のように記されている。「本書の著者 А.И. Черепанов 陸軍中將は1920年代に中国の国民革命軍の軍事顧問として、また抗日戦争期の中国政府の軍事顧問として働いた。彼は具体的な例を挙げて、抑圧者に対する中国人民大衆の戦いで、ソビエト勤労者の国際的援助がいかに大きな役割を演じたか、を明らかにしている。」

なお、Черепанов の回想録について述べる前に、Делюсин の序文は比較的短かいものであり、また内容的にも現在のソ連側の1920年代の中国国民革命期に於けるコミンテルンの政策に対する評価がよく表れているので、回想録について述べる前提として、以下の序文の全訳を掲げておく。

本書の著者である Александр Иванович Черепанов を読者に紹介する必要はないであろう。軍事顧問として20年代と30年代に中国で働いたが、そのことに関する彼の回想録は1925～1927年の中国革命及び抗日戦争の貴重な情報を有している。А.И. Черепанов の手記の価値は戦闘の目撃者であり参加者であることから生まれて

くる生き生きとした話が、記録資料によって補強されている点である。彼の回想や証言が、中国近代史の中の多くの重要な、しかし時には一部忘れられている事実を再現することができる信頼すべき史料として求められたり、引用されたりするのは偶然ではない。А.И. Черешановの先にならって、多くの退役軍人、即ち中国の民族解放闘争の参加者がペンを執って革命のためのソビエト、中国の協力の素晴らしい、英雄的な諸ページを生き生きと再現させたことも言うておかねばならない。

А.И. Черешанов の回想録は孫文の指導の下、中国の革命家達が 1911～1913 年の辛亥革命から始まった革命運動を勝利の結末へと導いて行こうとしていた時代の、はるかなる広州へ我々を連れて行ってくれる。当時、孫文は度重なる敗北の苦しみ、自分の友人や同盟者の裏切りや背信行為を経験し、20 年代、信頼できる助力をモスクワに求めた。かくて、革命中国とソビエト・ロシアとの政治的、軍事的協力が始まった。その協力によって中国革命は死点から動き出し、活気づき、広東の袋小路から抜け出し、広大な全中国に広がることになった。А.И. Черешанov の述べている報告はソビエトの援助が中国革命を前進させた決定的な推進力の一つであったというまぎれもない事実を再度確認している。

1923—4 年に孫文が招いたソビエトの政、軍事顧問が中国で活動し始めた当時の中国は大・中・小の軍閥が支配する多くの地域に分裂した国家であった。形の上では中国は共和国であり、北京には大統領がおり、中央政府が存在し、そこには信任状を持った大使が派遣されていた。実際には中央及び地方の権力は軍閥の手中にあり、その最大なものは張作霖を首領とする奉天派、呉佩孚の直隸派、段祺瑞の安徽派であった。この三つの軍閥はある時は互いに戦い、ある時は不安定ながらも手を結んだりしていたが、帝国主義と固く結びつき、それらに依存し、民族独立の達成、主権や国の統一を守る統一国家の建設に対する主要な障害となっていた。軍閥は農村に於いて、大地主、高利貸支配を支持し、資本主義諸関係の成長を妨げ、中国の社会—経済的及び文化的発展を妨げていた。

軍閥、とりわけ北方軍閥の圧政の打倒、国内に於ける真の共和制の確立が中国革命の主要な客観的な課題であり、国内に根本的な社会—経済的変革を実現するための欠くべからざる前提条件であった。この課題の解決のためにこそ、中国の革命的デモクラットである孫文の企てと努力が向けられたのである。中国革命の前に立ちふさがる基本的な諸問題の本質を彼は充分理解していたが、

それを解決する現実的な力を持たなかった。彼が指導する国民党は勿論、一定の形のないものであり、中国の大衆を立ち上げらせ、団結させ、導いて行くに必要な政治的・組織的クオリティーを持っていなかった。孫文には北方軍閥に対する闘争で、あてにして頼れる信頼すべき軍隊がなかった。そこで形の上では彼に従い、外見上彼に敬意を払っている將軍達に絶えず頼っていなければならなかった。しかしながら、孫文の力、彼の全民族的な意義は次の点にあった。彼が提起した綱領は中国の社会—政治的及び経済的発展の客観的な傾向を反映し、また中国社会の先進的階級やグループの共通の利益を表していた。彼は中国革命のシンボルであり、旗であり、彼の権威、彼の人望は中国に並ぶものがなかった。だが彼の事実上の権力は広州市及び広東省の三分の一の地域に制限されており、ここでも彼の地位は堅固なものを見なすことはできなかった。

広州に到着したソビエトの人々の前には極めて複雑な問題が待っていた。彼等まロシアとは全く異なった環境に出合い、言語も、心理も、世界観も、風俗習慣も未知なものに突然出合った。注意深くこれらの環境を研究し、それらに適応しなければならなかった。また同時に、革命のため、中国人民のためにはそれらを変えることが必要だった。そして彼等はこの課題を見事に処理した。彼等のエネルギーや彼等の活動的な行動によって、また彼等にとって中国革命の運命がその成功に心から関心を持つ血を分けた事柄となったことによって、彼等は中国革命の固有の部分、極めて重要な要素となった。我々の顧問たちの働きの結果、国民党は政党としての外観を持ち始め、またその軍隊は戦闘力をもつ革命軍に変わり始めた。最も重大な事件は国民党と共産党の合作の確立である。それは中国革命がさらに進行していく上に、決定的な影響を与えた。コミンテルン及び中国共産党の助力を得て、孫文は 1924 年初め、自分の党に戦闘的・革命的性格を付与すべく、党を再建し再組織した。しかし、新しい綱領の宣言が採択された第一次大会の後でさえ、国民党は国民的な政党にならなかった。それが全中国の利益の代表者や守護者の役割を持っていると主張している限り、組織された党は厳密に言えば、はっきりした階級的性格を身につけていなかった。結局、党内の優勢かつ決定的な影響は地主ブルジョア層の代理人や軍閥が持っていた。党内の労働者、農民の利益は孫文の同意を後で国民党に入党した共産党員によって反映され代表された。しかし、コミュニスト達はその当時、未だ確固とした社会的支持を持っていなかったし、背後に大衆組

織の支持も持っていなかった。国民党内に於ける彼等の役割や意義は主として、彼等とソビエト及びコミンテルンとの関係によって決定されていた。彼等の闘争地域では、後には持つようになったが、当時は自己の下に国内の確固たる、恒久的な根拠地を持っていなかった。

ソビエトの人々はすぐには中国の革命家達と共通の言葉を見出せず、その中の国民党の活動家の若干の人々とは同志的な相互関係は打ち立てられなかった。もっとも孫文及び彼の最も忠実な同志とはすぐに相互の尊敬と信頼に基づく関係が生じた。孫文と彼の親友達は非常に深く、全面的に十月革命の経験を研究し、中国の革命の進行を早めるためにそれを利用しようとした。孫文は注意深くソビエトの友人の提案に接し、耳をそばだてて彼等の勧告に聞き入った。勿論、彼は常にそれをその通り実行したわけではなかった。実際に彼はそれらを具体的な状況と一致させねばならなかった。

辛亥革命の経験から、孫文は自己の軍隊と資力の限界を悟った。どのような事で、党の自己の同志達の理解と支持をあてにすることができるか、どのような事で、彼らが孫文を求めてやって来ないか。一たとえやって来たとしても途中までである—ということを知っていた。彼は自己の政治的な同盟者をも思い誤ることはなかった。彼等に対しては大いに警戒心を持って頼った。將軍達の目論見は彼には明白であった。彼等は孫文に忠誠を誓い、彼を大元帥と宣言していながら、実際は彼を自分達のあやつり人形に仕立てようとしていた。それ故、彼は自分の理想や計画を実行する形式、方法、速度を具体的な条件に相応させていた。この時期の孫文の行動を、たとえ外見上一貫性がないと見えることがしばしばあったとしても、そのように評価することはできないであろう。そうした行動は彼自身及び彼が指導していた党に彼が課した諸目標や彼の政治的信念及び見解から生まれてくる方法に相応していた。彼が色々なマヌーバを利用したのはある程度、彼のまわりに集まっていた種々様々な多数の政治家や軍人の中で平和とコンセンサスを得ようとする彼の倦まぬ意図から発したものであった。彼は極端な反動主義に陥ってしまった狭量な保守主義者の右派国民党員とも異なっていた。同時に、彼を興奮させ、驚かせたのはコミニストのエネルギーな行動であった。それにも拘らず彼は誰をも失いたくはなかった。

すべての彼の同志、真の、あるいは偽の味方にとっての統一の原点はナショナリズムの原理であった。これを実現するために彼等はある程度、戦う覚悟ができてい

た。話が民主主義や民衆の安寧の原理に触れる事になると必ず意見の一致がみられなくなった。孫文も現実政治家として、こうした事を考慮に入れざるを得なかった。ソビエトの同志が彼に教えたことの一部しか彼が採り上げ、実行できなかった理由はこの点にある。

この際、次のことを強調しておくことが重要である。孫文は時には彼のロシアの友人達のアドバイスを受け入れないことが間々あったが、彼等に対しては常に良い感情を持っていた。ソビエト・ロシア及びそのミッションに対する彼の好感は弱まるどころか、逆に強まりつつあった。中国革命に対していかに巨大な効用を彼等の活動がもたらしたかという点で、実際の経験から確信を持った彼は彼等を高く評価した。彼は臨終の時まで、中国の革命家や全中国人民にソビエトの友情と協力を護り、強化することを訴え続けてきた。

1925年、3月、孫文の死後、国民党及び革命の同志の内部事情は錯綜し緊張した。国民党と共産党との間の対立が出現し、激化し始めた。そのことに元気づけられ、ますます不遜に振舞うようになったのは国民党の反動分子及び国民革命軍の將軍の多くであった。帝国主義者やその中国人の手先達は中国の“赤化”、“共産化”、“ソビエト化”の恐れがあたかも広東に由来するかのような騒ぎを撒き散らし始めた。それにも拘らず、まさにこの時期に、A.И. Черепанов のこの書にも示されているように、我々の顧問達の活動のおかげで国民党は敵意を持つ軍閥を広東省から追い払うことができた。この時、国民党内に種々の勢力分布が生じ、もはやそれは一枚岩の組織たることは決してなかった。国民党の指導部の中に絶えず右翼と左翼が形成されていた。国民党の活動家達を右派と左派に分ける基礎になるのは、共産黨員やソビエトに対する彼等の態度と協力の問題、勤労者大衆を革命に引き入れることに対する彼等の態度であった。しかし、この区分は暫定的なものであった。最初は左翼と思われる活動家が状況の変化に応じていつの間にか右翼の側に変わってしまうことはそれ程珍しいことではなかった。民族革命の発展に応じて左翼の構成メンバーが変化し、また国民党“左派”も右派も同様に彼等の実行する政治路線の内容が変化した。このことは A.И. Черепанов の本手記によく表れている。

第一次、第二次東方出撃に際して広東の山野で行われた数々の戦闘は恐らく現代の読者にとってはそれ程重大なものとは思われないであろう。しかし、それらの政治的意義は極めて大きく、それ故にこそ、中国革命の歴史に消しがたい跡を残しているのである。この二つの出撃

の過程で、軍閥の軍隊と革命軍との力量がテストされ、ソビエト軍事顧問が採用を要請した兵士及び士官の養成と訓練の方法や形態が戦闘の中で点検された。これらの出撃の結果、広東に於ける国民党の権力が強められた。国民党の政治及び軍事指導者は革命に対する確信を強めた。東方出撃や国民党内部でなされた大きな政治的努力によって、華南に革命が将来展開されるための橋頭堡や基地を創り上げることが可能になった。

この事を大いに促進したのは中国の他の地区で発生した諸事件であった。その中で最も重大な意義を持ったのは1925年、5月30日、上海で行われた反帝国主義デモや労働者階級のストライキ闘争であった。外国人の警官によるデモ隊員の射殺は全中国を憤激させ、新たな民族革命運動の高揚を引き起こした。しかし、この愛国運動は極めてアンバランスなものであった。ある都市では帝国主義者に対する大規模なデモが行われ、抗議集会が開かれたが、一方ある都市では市民は軍閥政権の条件の下で自分の気持を表すことができず、この事件に対して積極的な行動をとらなかった。農民階級は《5.30運動》には関係を持たなかった。中国全体をみると、中国の人民大衆は積極的・自覚的政治活動を行うまでには目覚めていなかった。未だ彼等の充分な組織ができておらず、また自己の権利と利益のために決定的な闘争を行う準備ができていなかった。

このような条件のもとで、軍閥権力体制に対して決定的な打撃を加えるに好都合な状況を利用する可能性は広東の革命陣営の軍事作戦の拡大、及び北方軍閥に対する直接的な軍事闘争への移行の準備の程度と、勿論結びついていた。労働者、農民運動が弱体であるという条件の下では、軍隊が中国革命の主要な要素になっていった。それ故、我々政治、軍事顧問のすべての活動もまた革命軍の創設と組織化に集中された。

この課題の解決を多くの点で困難にしたのは次のようなことであった。すなわち、広東に創設された新しい軍隊やその幹部はしかるべき政治的訓練を経、孫文の《三民主義》の主要な内容は把握していても、備わりの兵や将校に固有な性格の数々を保持していた。この事は広東の戦役がはっきりと証明している。この点では、自分達の敵、すなわち戦争稼業の連中と国民革命軍の将軍達とはほとんど差が無かった。将軍達は権力の強化や自分の名誉心の満足や自分の昇進のために、あらゆる機会を利用しようと努めていた。彼等は孫文の理想に基づくスローガンを喜んで口にし、革命に対し忠誠を誓った。しかし、その場合でも自己の個人的な利益は忘れていなかっ

た。偽善的に、中国人民に奉仕する用意があると声明しながらも、彼等が気にかけていたものは単に、いかにしてよりうまく働く人々の脛をかじるかという事だけであった。

北方軍閥体制打倒のための闘争を彼等は純粋に軍事的方法とみなしていた。彼等はこの戦いに人民大衆が積極的に参加することを認めようとはしなかった。なぜなら、そうなればこれら将軍達や将校達が密接に結びついている地主及びブルジョア階級の支配を無くしてしまうことになるかもしれないからであった。このような将軍の典型的な代表は蒋介石であった。彼は1926年、3月20日のクーデターの結果、革命陣営内の軍事及び政治権力を手中に収めることに成功した。А.И. Черепанов は蒋介石について興味深い性格描写をしている。それはこの将軍の性格をよく表している。しかし、状況の赴く所、まさに彼が1926年、7月、広東から出発した北伐軍の最高司令官に任命された。

北伐の戦略的計画は才能ある В.К. Блюхер をチーフとするソビエトの指揮官達によって作成された。まさに彼の戦争の天分、不屈の精力、政治的洞察力が北伐軍の成功と勝利に大いに結びついていた。Блюхер の鋼鉄のような意志は国民党の将軍達がなかなか改められない古い習慣や無気力に打ち勝ち、彼等を敵軍との決定的な戦いに参加させた。1926年の夏から秋、国民革命軍の各軍団は長江の沿岸地域へと進出した。北方軍閥は広大な地域から一掃された。国民革命軍の最大の勝利は1926年、10月の巨大な工業と、戦略上の中心である武漢の占領であった。この都市で1911年辛亥革命が始まった。これによって中国の王朝体制は終わりを告げたのであった。

国民革命軍は北伐の時期に著しく増大した。しかし、これは政治的知識や自覚を持った労働者や農民が革命軍に補充されたからではなく、主として中核部隊に軍閥軍隊が加入したという理由からであった。彼等が革命の側に移行したのは自分達の政治的・社会的観念や信念を変えたからでなく、国民革命軍に編入された場合でも自分達の信念を変えず、自分達の権力を保持するためであった。彼等は言葉の上で国民党の政治綱領を承認し、指導原理として孫文の理念を受け入れることを言明しても、本質的には自己の古い反人民的立場に立ったままであった。彼等が革命軍に加入したことにより、戦争の面ではある程度革命軍を強化したが、国民党の右派の立場を強化することになり、政治的見地からすれば、本質的には革命軍に弱化をもたらした。

革命軍が揚子江流域に出現した後、国民党が武漢と南

昌のグループに分裂した際、この事が著しく大きく現れた。1927年初頭までに、国民党政府は正式に自己の権力を華南及び華東の7省に広げた。政府は広州から武漢へ移動した。南昌に落着いていた蒋介石は政府を自己の従順な道具にすることを狙って、国民党政府の権力を手に入れようとし始めた。

このことは、国民党の支配下に正式に入った地域が拡大したために単に革命の全国民的課題だけでなく、その社会・政治的課題の解決に関する問題が日程にのぼるようになったことを関連していた。

どの階級の代表者が革命の進行を指導するか、また今後、中国革命はどのような道を通して進行して行かねばならないか、の問題が極めて鋭い形で持ち上がった。当時はプロレタリアートが革命でヘゲモニーを握るための現実的前提条件は存在していなかった。未だそのための客観的諸条件が熟していなかった。中国の労働者階級には未だ自分自身の革命を実行する力が無かった。軍事・政治力の現実的相互関係が利用できるように形成されていなかった。労働者階級と農民の同盟はでき始めたばかりのところであった。地主・ブルジョア陣営は革命を制御したり、事態の進行を支配するに十分な可能性を持っていた。

中国共産党—中国のプロレタリアートの前衛—は党员数がわずかであった。当時すでに、革命のための英雄的な活動ができる自己の能力は示されていたが、階級闘争の経験は未だ持っていなかった。国民革命軍に対する共産党の影響力は小さく、将校や将軍の支配から兵士大衆を解放できる状態には党はなっていなかった。中国社会を非資本主義的發展の方向に移行させようとしてコミュニスト達がとった革命の性格を変えようとするコースは時期尚早であり、革命陣営に於ける彼等の地位を強化する助けにはならなかった。

中国のブルジョアジーもまた革命の主導者としての役割を望んでいたが、それは不可能であった。彼等の政治的、経済的地位はこれを実現できる程には強力かつ堅固なものではなかった。中国のブルジョアジーは自己独自の階級的利害関係を表すかもしれないような政党をつくることができなかった。ある程度、国民党がこれを行うはずであったが、孫文の綱領は私的資本主義的な發展の道を予想しておらず、自由な民間企業に反対する傾向があった。政治家よりはむしろ軍人が主導権を握っていた孫文以後の国民党が実際には、地主及びブルジョアジーの利益を代表していた。彼等は客観的には利害は一致していなかったが、両者間の矛盾は抜本的手段をとるしか

解決の方法が無いというほど白熱した状態には未だ到っていなかった。中国ブルジョアジーと帝国主義者との間の矛盾もまた、革命的な強制手段による以外にそれを解決することができないというような發展の段階にまでは到っていなかった。

国民党の將軍達は北伐で決定的な勝利を収めた後は、もっとも初歩的な社会改革にも反対し、労働者、農民に代わって、中国共産党が整理しまとめた政治的及び経済的要求の実現に対して断固として抗議した。

武漢の国民党政府は最初のうち、蒋介石の要求を拒否し、コミュニストとの同盟を維持していた。しばらくの間、北伐を最後の勝利へと導くための最も重要な基地として武漢を保持していたという希望があった。我々の政治及び軍事顧問達は革命の成果を固め、中国の労働大衆に最も有利な流れに沿って革命を動かそうと、少なからぬ努力を払った。しかし、これを実現する客観的な可能性はなかった。国民党の武漢委員会の内部に、権力の分裂が始まった。労働者及び農民の運動の水準や成熟度を過大評価したプチブル急進主義者達の誤りによって、国民党と共産主義者との分裂が速められた。本書の中で、当時、中国でつくられた劇的な状況を描いている興味ある諸ページを読者は見いだすことであろう。А.И. Черепанов は中国革命の事業を助けようと、中国共産主義者及び国民党《左派》を援助する我等の顧問達の行った色々な試みについて述べている。革命の危機的な時期でさえ、中国のデモクラートと共に彼等は誠意をもって悲劇と敗北に耐えてきた。

1925—1927年の中国革命は中国共産党が革命に対して出した課題を解決することができなかった。それはプロレタリアのヘゲモニーの獲得と中国を非資本主義的發展の道へ移行させる条件をつくり出すことであった。この意味では、革命は敗北を喫した。革命の客観的な課題を自由な資本主義的發展のための諸条件をつくりあげることだと考えたとしても、革命はこの意味でもまた、目的を達成することができなかった。国家の民族的統一の問題も解決されなかったし、中国には議會制度も確立されなかった。南京に国民党の政府がつくられた後も、民衆は（その中にブルジョアジーも含まれているが）以前と同じように市民としての諸権利が奪われたままであった。国民党の採択した法律はブルジョア・デモクラシーの基本的な原理を実現する可能性を保証するものではなかった。国家の中で支配的だったのは、過去と同じように専制政治であって、法ではなかった。

それにも拘らず、1925—1927年の中国革命は中国社会

に本質的な変化を持ち込んだ。国民党政府の樹立はその反動的、反民衆の性格を考慮に入れても、軍閥の支配システムと比較すると、疑いもなく一歩進んだものであった。国家の政治的統一へ向かう傾向を完全に実現しようとする途上に、たとえ客観的にも主観的にも大きな諸々の困難が相変わずあったにしても、その傾向は強められた。革命は中国の経済発展にとってより一層都合な可能性を開いた。中国共産党は自己の敗北から重大な教訓を引き出し、40年代の国民党との決定的な戦いに於いて、彼等が20年代に犯した誤ちを二度と繰り返すことはなかった。このことは革命の勝利の達成に重要な役割を演じ、また国民党政權の解体と中国人民共和国の成立をもたらした。

A.И. Черепанов の回想録の簡単には見すごすことのできぬ価値の一つは我々の前に多くのソビエトの人々—1925～27年の中国革命の活動的な参加者—の明るいイメージがその本の中から現れてくる点にある。本書の著者に特に感謝しなければならないのは、国民党の政治顧問団団長であった Михаил Маркович Бородин 及び軍事顧問団団長 Василий Константинович Блюхер の活動に捧げられた諸ページに対してである。彼等の名前は中国革命運動の歴史、ソ連と中国の友好の歴史に永遠に留められている。

A.И. Черепанов の中国回想録の後半部分は抗日戦争の困難な時代に中国に派遣された我等の軍事顧問団の活動を語っている。1937年、日本軍部が対中国戦争を始めた時、ソ連は再び中国人を助けるためにやって来た。1937年、10月から1939年、10月までの間に、ソ連は中国に航空機 988 機、戦車 82 台、大砲 1300 門、機関銃 14000 丁、大量の弾薬を提供したことを述べるだけで、このことを証明するに十分である。1939年、2月中ばまでの間に、日本の侵略者との戦いに参加したのは 3665 名のソ連の軍事専門家であった。1941年に至るまで、我が国は日本の軍国主義者に反対する戦いで中国に軍事—技術援助を行った。この援助や、さらに政治的支援によって日本の侵略者と容易ならざる戦いを行っていた中国人民の抵抗力は強まった。

A.И. Черепанов の回想録によって我々は抗日戦争の特殊性をより良く、明瞭に推察できるようになり、また無能な将軍がしばしば指揮していた中国軍の敗北、失敗の根深い社会的・政治的原因を知ることが可能になった。危険で残酷な敵を前にしてさえ、蒋介石の国民党は救国の課題を派閥や門地の利益よりも上に置くことができなかったことがわかった。そして、その手本を示した

のは国民党の支配者—蒋介石その人であった。

国民党内部の種々の派閥間の果てしない争いや中国共産党や大衆組織に対する敵対関係が中国民族の結束と、敵対者に対する闘争に持てる全力を動員する妨げとなった。国民党は抗日戦争の時期でさえも、中国人民を組織し、彼等を自己の方に集中させることができるような統一した政党にはなれなかった。蒋介石一派の反人民的・反動的な政策は抗日統一戦線の陣営に分裂という結果をもたらした。日本の侵略者に有利になるような行動をとった。中国の戦いは敵との戦いで、色々な機会に勇氣と自己犠牲を示し、個々の会戦で敵を撃破し、日本軍国主義者の戦略的意図を打ち砕き、彼等が中国内部へと侵入する速度を遅らせた。しかし、こうした英雄的努力も国民党派の反人民的政策によって弱められてしまった。彼等が自分達の全ての希望を託したのは連合国が日本の侵略者の軍隊を打ち破ることであった。しかし一方、蒋介石の方は反動政權の強化を目指し、来たるべきコミニストとの戦いに備えて自己の力を使わず蓄えておいた。

A.И. Черепанов の著書を読み返すと、本書の特徴ともいべき彼の中国人民に対する心からの愛情を認めざるを得ない。まさに本書は中国人民に対して著者が抱いた、そしてこれはまた全ソ連人民の気持でもあるのだが、暖かい、友好的な気持を見事に証明している。A.И. Черепанов 中將は退役した現在でも、ソ連中国友好協会の仕事に活発に参加している。彼の回想録は親愛な中国人民に対する然るべき敬意であり、ソ連と中国人民の戦争協力に関する共通の歴史に貢献している。

Л.П. Делюсин

Лев Петрович Делюсин

1923年、11月16日、モスクワの勤め人の家に生まる。1950年、モスクワ東方学院 (Московский институт востоковедения) 卒業。1961年、12月15日、歴史学修士、論文のテーマ、《農業改革期 (1950～1952年) の華中、華南の農村における階級闘争》。歴史学博士 (1971. 1. 15)。主任研究員 (1969. 4. 8)。中華人民共和国ブラウダ特派員 (1950～1953)。《平和と社会主義の諸問題》 (1958～1959) 誌の寄稿者。ИЗ МСС (Институт экономики мировой социалистической системы АН СССР: 世界社会主義システム経済研究所) 1970～1972、研究員。国際労働運動研究所長代理 (1966～1967)。Илибон 所長 (1970～1972)。ソ連科学アカデミー—東方学研究所中国部主任 (1967年より)。独ソ戦参加 (1942～1944)、勲章やメダルを受ける。約 100 点の研究が出版されている。シノロ—グ国際会議 (XII XX XXI) 参加。太平洋諸国家経済協

力国際会議 Межднар. конференция по экономическому сотрудничеству тихоокеанских стран (Чили 1970) 参加。

主要論文

博士論文 中国共産党の政策に於ける農業—農民問題 (1921~1928 年) 1970 (АН СССР 東方学研究所)

人民中国にて Госполитиздат 1954

中国農村の偉大な変化 Госполитиздат 1958

人民解放戦争期 (1946~1949 年) に於ける 中国共産党の農業政策 ≪アジア, アフリカ人民≫ 1961, No. 5

中国のブルジョア右派分子との闘争 (1957) Изд. вост.

лит. 1961

土地は耕すものに, Изд. вост. лит. 1961

社会主義の平和と被抑圧民族の解放 ≪Знание≫ 1962

農業問題解決に対する中国共産党の闘い, ≪Наука≫ 1964, 184 с

中国に於ける文化革命 ≪Знание≫ 1967, 48 с

中国に於ける政治危機, 事件とその原因 Политиздат 1968

中国に於けるマルクス主義普及の歴史から「マルクス主義と東方諸国家」1970 с 95~111

社会主義論争, 20 世紀初頭に於ける中国の社会—政治思想の歴史から М. ≪Наука≫ 1970, 92с (АН СССР 東方学研究所)

(БИБЛИОГРАФИЧЕСКИЙ СЛОВАРЬ СОВЕТСКИХ ВОСТОКОВЕДОВ, ≪Наука≫ 1975. より)